

東寺觀智院金剛藏『野澤流派略記』（特4箱13号）の調査報告と翻刻

湯 浅 吉 美

はじめに

東寺觀智院金剛藏聖教類の閲覧調査報告の一編として、

了解されるであろう。その間、いわゆる「唾をつけた」体となり、御迷惑をかけた向きもあつたやもしれず、真に申し訳なく思つている。

今回は標題資料を採りあげる。思い返せば、最初に閲覧したのは平成二二年（二〇一〇）。かくも時日を経過した最大の要因は無論、報告者の非力に帰するのだが、恰も活字化されることを拒むかのようだ、激しい推敲修訂の痕が障壁となつて立ちはだかつたことも、一瞥ただちに

に対し、幾重にも御礼申しあげる。将来にわたり、この調査が継続されるよう、願つて已まない。

また、岸田照泰貫首猊下をはじめ、新勝寺および仏教研究所の皆様の御高配も忘れてはならない。地味な基礎研究に対して惜しみなく注がれる御温情なくして、このようないきの永い仕事を続けることは不可能である。とりわけ、いつも微笑を以つて入稿をお待ちくださる研究所事務局の伊藤照鏡師には、別して謝辞に窮する。昨夏の調査以前に粗原稿ができたにもかかわらず、結局は限界まで遅滞したことを、また併せて、規定の紙幅を大幅に超過していることを、衷心よりお詫びする。

なお本報告は、書誌事項の記述と全文翻刻の提示のみに止める。内容はまことに興味尽きぬもので、小野・広沢諸流の分派の次第や嫡末・正傍の評価、それに纏わる裏話的な事情など、吳宝ゼミナールの面目躍如たる観がある。見返しに並ぶ事書から、十分それは推知されよう。しかしながら、悲しいかな在俗の身には、文は追えても理解の及ばぬことばかり。辞書・事典類に縋つて半可な記述をなすことは憚られる。しかるべき専門家の読解に委ねるべきであるから、専ら情報提供に終始する微衷を御諒察いただきたい。報告者は学問世界での自らの立ち位置を「町の開業医」だと考えており、本報告は言わば、彼ら彼女らが大病院の専門医に向けて発行する紹介状と言える。願わくは、専門医の慧眼に捉えられ、本資料が最も適切なる処遇に浴さんことを。とはいへ、さすがに少しば忸怩たる想いも抱きつつ、諸賢の御諒察をお願いするところである。

なお本報告は、書誌事項の記述と全文翻刻の提示のみに止める。内容はまことに興味尽きぬもので、小野・広沢諸流の分派の次第や嫡末・正傍の評価、それに纏わる裏話的な事情など、吳宝ゼミナールの面目躍如たる観がある。見返しに並ぶ事書から、十分それは推知されよう。しかしながら、悲しいかな在俗の身には、文は追えても

《書誌事項》

野澤流派略記（特4箱13号『目録』19-260頁）^①

南北朝時代文和二年（一三五三）賢宝写 一卷

【装訂】巻子装。全長一八米九〇・四糸。

【表紙】原装素紙表紙、縦二四・三糸、横三三・六糸。

外題「野澤流派略記」（直接墨書の原外題に重書き）。

外題下に「賢寶」とあり（外題同筆、直接墨書き）。

【見返・遊紙】見返に内容の事書あり（本文同筆）。遊紙なし。

【序・目録】序なし。見返にある事書が目録に相当。

【本文部分】内題「東寺一門法流分派略記」を墨抹し、次行に内題「野澤流派略記」。楮紙。紙数六三。標準一紙長三八・九および三三・七糸。^② 料紙横長は、最小五・三糸、最大四三・八糸、長短あり。紙高二四・一糸。無辺無界。每紙行数不等。毎行字数不等。字面高さ約二三糸。全巻にわたり激しく推敲修訂（墨抹して傍書・重書き）。ごく少数の異本注記。全巻にわたり

訓点（返点、捨仮名、フリガナ、少数の声点、少数の

音・訓合符など。墨筆）。数箇所に裏書。数箇所に異

本注記（朱）。^③

【尾題・奥書】尾題なし。文和二年（一三五三）の書写

奥書（賢宝）および延宝五年（一六七七）の修補識

語（昊快）あり、翻刻参照。

【その他】第36紙右端八行ほど破損し、当該部分本文を

裏打紙に補写してあり。

注

（1）『目録』は、京都府立総合資料館編『東寺観智院金剛藏聖教目録』（京都府教育委員会、一九七五-八六年）を指す。以下の書誌事項には『目録』と相違する計測値などもあるが、報告者の実見・実測したところを提示し、とくに必要のない限り指摘・注記はしない。

(2)

標準一紙長とは筆者が書誌事項の報告をする際に使用している造語である。文字どおり、当該巻子本を構成する料紙一紙の標準的横長を意味する。原則として最頻値（モード）を探るが、継ぎ目糊代に伴う誤差の範囲内において複数の最頻値が出るならば、その平均を探る。もともと複数種類の料紙が用いられる場合には、それぞれの標準一紙長を記載する。事々しいようと思われるかもしれないが、一葉ごとに採寸してゆくと、料紙利用の様態が鮮明に浮かび上がってくる場合がある。たとえば、時や人を異にする書き継ぎ、推敲に伴う切断など。

(3) 異本とは本資料そのものの別本の謂と思われるが、あるいは、本資料の撰述時に参照した情報源の別本を指すのかもしれない。ちなみに『国書総目録』では、本資料は立項されておらず、類似の書名として『野沢血脉流派略記』と『野沢流諸派略記』とを見る。前者は『昭和法宝目録』所収『勸修寺大経藏聖教目録』を典拠とするが、東寺（とくに果宝ゼミナール）と勸修寺との密接な交流に鑑みて、大いに床しく思われる。後者は東大史料編纂所に蔵する一冊で、東寺藏本写の由。これにもまた食指が動くものの、報告者未見である。

《翻刻例言》

* 改行、傍記、小字片側寄せ、小字双行などの体裁は原本どおりとする。文字の大小、配置なども、努めて原本の態様を髣髴せしめるよう心掛けた。ただし、字間の空きについては十分には再現していない。

* 用字については以下の方針に従う。

· J I S 内漢字および『今昔文字鏡 単漢字 10 万字版』（東京、紀伊國屋書店、一〇〇一年）の TrueType フォントを用いて表現可能なものは、原則として原本の字形を活かす。したがって、同じ字の新旧あるいは正俗の混在する場合がある。

· それ以外の別体字は、右の範囲内に存する最も適当な文字に改め、必要に応じて翻刻注を施す。

· ごくふつうに使われる別体字は、殊更に原本の字形を出さずに通行字体を用いる（例えば、ホ→等、

苻→符、弘→弘など）。

筆法によつては、筆写者がどの字形を書こうとしたのか判然としない場合が少なぬ。その際は概ね通行字体を用いへる。

原本の字形を残すか、通行字体に置き換えるか、その判断にややゆらぎがある。とはいへ、よほど用字法などの検討に踏み込まぬかぎり、あまり厳格に呻吟することは無意味であろう。そのような必要のある場合には、他人の翻刻に頼らず、あらためて原本を閲すべきである。なお、原本の字形を残す基準は、視覚的な違いが顕著、部首を異にする、など。

ごくわずかに古体のカタカナを見るが、現行のカタカナに開く。

本資料においても、大と太、小と少など、他の資料でもふつうに見られる異字通用がある。これらについては、翻刻には原本にあるとおりの字を出し、一々（ママ）を付けなかつた。この方針によると誤植の

識別が困難という憾みもあるが、疑わしい場合には報告者まで照会されたい（ezk01525@nifty.com）。

カタカナの合字「フ」「ヅ」については、それぞれゴシック体で「フト」「シテ」とした。

* 年月日や人名などで文字省略を示す「ハ」と「一」とについては、形の近いほうを用いる。

* 文字の左傍に「×」、右傍に（別の）文字があるのは、いわゆる見せ消ち、または、元の字が見える程度に墨抹している箇所である。ただし、「缺」など一部の外字については、*LATEX2 ϵ* マクロ（報告者作成）の都合上「×」を付けることができなかつたため、翻刻注を付して対処している。また、訓点が錯綜して組みかねるときも、同様に翻刻注で対処する。

* 元の字が見えない（読みかねる）墨抹は、字数分の「■」を以つて示す。左傍「×」は付さない。

* 擦消による修訂や、新たな字句を（傍記でなく）重書したものなどは、翻刻注を付して対処する。

* 朱書きは一重カギ括弧『』を以つて括る。

* 括弧（）内は、報告者の加えた字句を示す。

* 每紙、冒頭に紙数を示す。後半に出現する系図において、横線は原本では無論繋がつてゐる。

* 裏書きは原則としてオモテ面の直後に（第何紙裏書き）として掲げる。ただし、裏書きがごく少分の字句ならば、翻刻注で対処する。

* 少数ながら、字句に合点を打つた箇所がある。それについては、当該字句右傍に太線を施す。ただし、実際には「」のようなカギ点である。

* \TeX では注の管理がすゝまる容易なので、原本所見に係る翻刻注は全て注として末尾にまとめた。なお、この点は \TeX を採用するメリツムの一つでもある。

* その他、一般的な翻刻に準じて解釈されたい。

- 《付記》
- * 小稿は報告者自身が日本語版 $\text{\LaTeX} 2_{\varepsilon}$ (角藤亮氏による「ねむる角藤版 $\text{\LaTeX} 2_{\varepsilon}$ 」) で組版し、大島利雄氏公開の “dvout for Windows” version 3.11.4 によつて印刷出力したものを作成して使用した。
 - * JIS 外漢字を組版するため、『今昔文字鏡 単漢字 10万字版』(東京、紀伊國屋書店、1100年) の TrueType フォントを使用した。当該フォントの著作権は株式会社エーアイ・ネットならびに文字鏡研究会にある。
 - * 前項のフォントを $\text{\LaTeX} 2_{\varepsilon}$ 上で使用するに当たり、堀田耕作氏によるフリーウェア Mjfonts ペンケージを利用した。
 - * これらのソフトウェア等を開発・公開された諸氏に心より敬意を表する。

野澤流派畧記

賢寶

(見返し)

延命院遇蓮臺寺所受為法皇御傳歎事

野澤通用傳法灌頂式事⁽¹⁾

野澤兩流有傍正否事⁽²⁾

義範範俊法流相論事

範俊^{門流}
下有嫡末事

通用式事

勸修寺流血脉事

後宇多院勸修寺流御傳受事

傳法院本願上人當流受學事

小野三流嫡末事

安祥寺流事

隨心院流事

金剛王院流事
理院流事
無量壽院流事
三寶院流事

同流仙覺觀高相論事
同流牛玉相承事

×量壽院流松橋事

報恩院方三寶院流事^③

東南院三寶院流事

勸修寺長吏次第事同寺建立事

(第1紙)

東寺一門法流分派略記
内題

野澤流派略記

一 延命院遇蓮臺寺所受為法皇御傳哉否事

或記云口決二云ク此ノ傳法灌頂印明者香隆寺ノ寛空

僧正謁シテ般若寺ノ觀賢僧正ニ遂ニ受職灌頂一所ノ受印

明也其後延命院ノ元果僧都隨ニ寛空僧正ニ用ニ具

支灌頂、儀式一觀賢所受ノ傳法灌頂ノ印明還テ亦傳ヘ

取ル小野ヘ也云依此ノ記ニ者蓮臺寺所レ授ニ延命院ニ者

般若寺ノ傳ニシテ非ニ法皇ノ御傳ニハ但シ此傳大ニ招ニ相違ニ欽小野ノ

六帖ニ舉テ蓮臺寺ノ御傳一注シテ其ノ相承ニ云惠大真

源益禪寬元仁云々為禪定法皇ノ御傳之

條無疑ニ何ニ况ヤ蓮臺寺授延命院ニ血脉ノ文云遠自

大日如來迄于禪定法皇ニ胎藏界十一代金剛界十

二代相承傳來小僧幸ニ蒙テ法皇ノ印可ニ適受ニケテ具支

灌頂ヲ今傳ニ件ノ大法師ニ云々是又法皇ノ御傳載レ文ニ

顯然也有テカ何ナル子細ニ云ニ般若寺ノ御傳ト乎可尋決之

又乘印阿闍梨血脉云觀賢—法皇

寛平
重受

元果大僧都云々法皇對ニ觀賢ニ御受法ノ事祖師

聖濟二位僧正ノ記云見小野抄云々小野ノ抄ト者指ニ宗林

(第2紙)

要一欽彼文云第十二ニ僧正觀賢ハ讚洲ノ人也○寛平法皇御出家師并傳法灌頂ノ師云々然レハ則蓮

臺寺以ニ法皇ノ御傳ヲ授クト云延命院ニ之義雖レ合スト六帖并ニ血脉ノ文ニ以般若寺ヲ為元祖ト此レニ又有二ノ難一ニハ代數相違若依乘印カ記ニ者胎藏界自大日如來至禪定法皇十ニ二代金剛界十④

三代也忽ニ達ス具支ノ式并ニ血脉ノ文ニニハ達ニ小野ノ六帖ニ彼レニ既ニ

云益禪寬元ト豈ニ非ニ円城寺ノ御傳ニ乎何ソ云觀賢ノ

御傳ト乎可咲々々然則當流ノ所存ハ具支ノ式血脉ノ

文并ニ小野ノ六帖ヲ為シテ本據ト益信法皇寛空

元果次第ニ相承之ニ以ニ此ノ傳ヲ為スル正説ト也

一延命院遇石山内供有作法灌頂哉否事

具支灌頂式延命院云内供垂慈ヲ早ク授ケ密印許

可之秘ヲ僧正奉ハテ 勅ニ重傳ニ具支灌頂之嚴イツクシキヲ一抑遠

自ニ大日如來迄マテ于蓮臺僧正胎藏界十二代金剛界十三代相承傳來石山ノ内供又同葉也云々就之古

來有二ノ義一義云對シテ内供ニ有作法灌頂一其ノ故ハ亮惠

具支抄云同內供ハ无シ具支ノ作法ト爾ラハ誰レノ人ニカ傳授スル耶⑤

答具支灌頂ノ記ニ云ニ許可ノ作法ト既ニ此ノ具支內壇ノ作

法ヲ注ス許可ノ作法ト又三摩耶戒ノ作法ニ云ク内供垂テ哀ヲ早ク

(第3紙)

授ニ密印許可之秘文可察々々一云此ノ意ノ云見ルニ具

支ノ式ヲ初ニハ表シテ内供垂慈一授クト密印許可之秘ヲ至レ奧ニ注シテ許可ノ作法ト明ス種々ノ行用一初後ノ許可ノ言不可差異一定テ知ヌ

有ニリト作法灌頂一云事ヲ又延命院大僧都天曆二年八

(第4紙)

月廿八日受密印許可於石山內供ニ康保ニ

年十一月十五日受具支灌頂於蓮臺僧

正ニ而ルヲ天德元年十二月五日延命院為シテ大阿サ

リト授灌頂於平耀阿闍梨ニ是對シテ蓮臺寺ニ

御入壇以前也自天暦三年一至天德元年一經九個年

自天德元年一至康保二年一經九個年

代々祖師師資行用之儀不遂作法灌頂ヲ無シ

勤阿闍梨ノ之例上今既ニ對シテ蓮臺寺ニ御入壇以

前ニ授灌頂於平耀明ニ知ヌ對シテ内供ニ有リト其ノ作法一

云事物意云内供專ニスルカ幽居ニ故ニ調外儀一

(第5紙)

列シテ衆衆一作法灌頂無之一雖然リト整ニ道場内作

法ノ儀無非ス無キニ之上古殊ニ被重事ノ儀都テ為メ法ノ

不可有ニ聊尔之儀爭テカ無ラン内壇ノ作法哉師

資相承口決如此不可異求者欽

一義云康保二年十一月十五日蓮臺寺授延

命院一血脉文云彼ノ阿闍梨本猷稠人一長ク閑ツ幽^⑥

戸一曰^テ之レニ唯シ授^テ密印許可一不行ニ具支灌頂^{ヲ云々}

縱雖レ不レ列ニ色衆等^ヲ若行内壇作法者是

行^{スルナルシ}具支灌頂^ヲ今既ニ云レ不レ行以知ヌ唯シ受^テ印信^ヲ無シト

其作法一云事凡上古ハ小野廣澤無別執^一

故ニ互ニ通^ス傳授^ヲ縱對^{シテ}石山ニ雖無作法灌頂^{一蓮^ヲ}

臺入壇ノ儀更ニ為法流ノ非ニ過失ニ廣澤ノ流ノ

嫡祖多ク入^テ小野ノ流ニ有ニ御受法所謂寛平法

皇、蓮臺僧正受般若寺僧正^一大御室性信^⑧

受小野僧正^一仁海高野御室覺法受^ケ後ノ小野

僧正^一範後北院ノ御室守覺受覺洞院僧正^一勝賢

并源運僧都等ニ兩流俱ニ受^ケ大師血脉^一

同ク窮法流ノ渢源^ヲ互ニ致シテ傳授^ヲ曾^テ無徧執^一

仍石山ノ内供事ニ陰居^ヲ無作法ノ儀^一故ニ遇^テ蓮

臺僧正^ニ雖被^レ遂此儀^一還^テ任^ニ石山^一口決^ニ■■^ニ秘密
灌頂^{ニノ}^{行儀^ヲ}何必^{シモ}致^テ鬚^ニ鬚^ノ料簡^ヲ不^レ云^三有^{リト}作法^⑨
灌頂^一乎

以上兩義中先師僧正以初ノ義^一為相承ノ

習^一之由被仰之^一後ノ義^{■ハ}何ニモ廣澤心地^{ニテ}^⑩

學者致^ニ今案^ヲ欵^{云々}

問依初義意^一者血脉ノ文^{ヲハ}云何可會之^一乎

答或料簡云^{延命院御灌頂^ヲ}康保^一年十一月廿一日也其^ノ

故^ハ延命蓮臺寺授延命院^一血脉云仍以

今年十一月廿一日^{角宿^ヲ}日曜於蓮臺寺授与

傳法灌頂職位^ヲ若尔者十一月十五日^ノ血

脉^ハ偽書也入壇以前^ニ豈書^{カキ}^ニ与^{エシ}血脉^ヲ乎而^{ルヲ}

彼^ノ廿一日^ノ血脉^{ニハ}唯授密印許可不行具支

灌頂ノ文不載之十五日ノ血脉ニ有之彼既ニ為

偽書^一上者頗不足會通^一今案^{スルニ}之ヲ十五日ノ

血脉非^ニ偽書^ニ欵長者補任^云康保元年十一

延命院段

月廿九日為傳法阿闍梨^{年五十四}禱三十五^{二年}正舉¹¹

十一月十五日隨僧正寬空受具支灌頂^{云々}

祖師^{聖濟}二位僧正被注^シ遣^三覺濟僧正^ニ血脉同之^一

¹²

(第7紙)

此ノ外乘印闍梨乘覺乘僧都等カ血脉抄

^x

皆同之^一隨^テ長曆三年仁海僧正授成典

僧正^一血脉ノ文云康保二年十一月十五日於僧

正法印大和尚位寬空所傳受灌頂職位

印可^{云々}爾者以十五日ノ血脉^ト不可云偽書^ト十

五日廿一日兩通血脉代々祖師以自筆^ヲ留^ム

案^ヲ兩通流行^{○真偽難}^{有子細事也}弁^ヘ可尋^若決^音之^一若

就十五日血脉一設^{マウケ}會通^ヲ者彼十五日血脉ノ

文云右大法師於^ニ故內供奉十禪師淳祐阿

闍梨ノ所^ニ兩部ノ大法諸尊ノ儀軌五種ノ護摩

悉曇宗義皆悉^ク受學、許可灌頂以^テ⁽¹⁾

究^{キハム}之^ヲ談^{スルニ}其^ノ所學^ヲ皆可謂寫瓶^{ムカシニ云}許⁽²⁾

可灌頂^一是即具支^ノ式^ニ所^ノ載^一密印許可^ノ作⁽³⁾

法也對^{シテ}內供^ニ受^{スト}作法灌頂^ヲ云事■：■無⁽⁴⁾

疑^一者欵但不行具支灌頂^ヲ者且^ク不整外

儀^ヲ故^ニ且^ク云不行ト非^ス無^{キニハ}內作法^一得^テ意^ヲ可^レ領

旨^ヲ守^テ株^ヲ勿費見^一而已

(第8紙)

一 通用式事

傳法灌頂

通用式者 小野廣澤ノ兩流ノ傳法灌頂通用此^{二卷}式故^ニ云通用式^一

⁽⁵⁾

式^{一ト}_×仍勸修寺仁和寺以此式^一行^{二スル}灌頂^{一ヲ}也醍醐ノ

流^ハ勝覺權僧正^ノ時依^テ具支^ノ式^{一始}_テ被作^二灌頂^一_{延命院}

式^ヲ是^ヲ名^ニ新撰^ノ式^ト是即彼^ノ具支^ノ式^{一深秘行}_{一夜作法}^二_{□□○□}₁₇

用^{ナルカ}故^ニ分^テ為^ス兩夜^ノ灌頂^ト當時^ノ醍醐ノ流^ニ所^用_行^一

偏^ニ此^ノ式^也當流^ノ所存^ハ彼^ノ新撰式以前^ハ醍醐ノ

流^モ用^{ルソヤ}何^{レノ}式^ヲ欽此事先師^云新撰^ノ₁₈

式以前用^{ルソヤ}何^{レノ}式^ヲ哉^ノ由相^ニ尋醍醐ノ輩^ニ處^ニ₁₉

(第9紙)

無分明^ノ答^一若無別^ノ式^一者依通用^ノ式^一之^ニ條無^ニ

疑^云仁海授成尊覺源授覺俊之時初台後金^云■■■₂₀

々若依此式行之欽小野六帖所載大覺寺式等大略此式也

問彼^ノ通用^ノ式^ハ或^ル說^ニ云遍照寺僧正作^云

爾者偏^ニ是廣澤流^ノ所用也若嚴覺僧都

受^{ニケテヨリ}信覺僧正^ニ以來勸修寺^ノ流^ニ用之^一欽禪覺

僧都記云又勸修寺ノ流ノ灌頂ハモト本是廣澤ノ
流也遍照寺御房授ケ深覺僧正ニ給深覺

授信覺一々々授ニ嚴覺一々授ク寬信一嚴覺

授範俊僧正ノ成テ後小野ノ様ヲ傳ル也寬信法

務初メテ行海ニ授クルトキ廣澤ノ流ヲ本躰トシテ其ノ樣被

授之ヲ已上慶宗法眼物語云々爾者勸

修寺流ノ灌頂モ尋レハ其源ヲ者廣澤流ノ灌頂

欵如何答先慶宗法眼ト者何ニ者乎

所示一違ニ本流ノ相傳ニ見ルニ今ノ記ノ樣ヲ嚴覺

受ケテ信覺ニ先ツ授ケ寬信ニ其後成範俊ノ弟

子ニ傳ル小野ノ樣ヲ之趣載ニ之欵嚴覺大僧都ハ^宣

康和四年十二月廿二日隨ニ範俊僧正ニ受灌頂一

其後通廻ニ經テ七个年ヲ天仁元年十月四日授

灌頂於寬信^ニ全^ク非^レ不^{サル}成^ラ範俊僧正ノ資^ニ以前^ニ
非^三授^{クルニ}之^一隨^テ行^海_{〔寛信所授〕}小野流ノ灌頂^{ニシテ}非^{ニス}廣澤^ノ

(第10紙)

流ノ灌頂^ニ云^ニ印信血脉^ト云作法行儀^ト不可混
亂之^ヲ抑^レ灌頂^ノ式^件_{〔撰■者不分明有入云〕}是大師御作^{云々}也廣澤流^ノ^{〔22〕}

相傳又如^{ナル}此^ノ欽有助僧正顯譽僧正等^ノ相傳^ノ_{〔説如此^ニ〕}^{〔23〕}
義皆如此^ニ仍^レ小野廣澤ノ両流同依此式^{〔歎〕}此^ノ式

若遍照寺御記^{ナラ}者嚴^覚_{〔自其以前灌頂行儀〕}以前小野流ノ灌頂^{〔通用有其謂〕}
以^レ式^{〔ヲ為依憑乎〕}乎兩界^ノ両部^ノ大法猶以次第^ヲ行^{〔法則〕}^{〔24〕}

之^一所謂大師以來代々祖師皆製次第^{ニ至}_{〔記〕}^{〔25〕}

灌頂^ノ事^ニ何無次第^一乎若秘密^{ナルカ}故依難載^{〔述記〕}

文^ニ可^レ云^ニ不^レ作^ニ次第^ヲ欽是又不爾畧出經第

四大日經ノ具縁秘密ノ両品及灌頂ノ儀軌

等 ■ 具 ^ニ 明 ^ニ 秘密 ^ノ 道具 ^ヲ 各示 ^ス 内證 ^ノ 行儀 ^ヲ

載 ^テ 次第 ^ニ 行 ^{セシ} 之 ^一 有 ^{ラン} 何 ^ノ 過失 ^カ 畫夜 ^ノ 行事

兩壇 ^ノ 作法不用次第 ^ヲ 者法事難成一定 ^テ

知 ^ヌ 通用 ^ノ 式為大師 ^ノ 御作 ^一 故 ^ニ 以 ^之 一 為 ^{シテ} 本源 ^ト 両

流行 ^ヒ 来 ^ル 之 ^一 欽敢 ^テ ^{不可云} 嚴覺 ^ノ 時始 ^テ 用 ^{ルト} 之上者也 ²⁶

有云此式法皇御作款相似小野六帖所載大覺寺灌頂作法故也延命院從蓮臺寺令相承款 ²⁷

問醜酬流 ^ハ 初金後胎 ^ニ 行 ^之 一 是即尊師以

來小野 ^ノ 流代々行用 ^ノ 作法欽廣澤流 ^ハ 円城

寺 [○] ■ 授 ^ケ ■ 法皇 ^ニ 以來代々初台後金 ^ニ 行 ^之 一 ²⁸

而今勸修寺灌頂初胎後金豈非廣澤流 ^ノ

(第11紙)

灌頂 ^一 乎如何 答小野六帖 ^ノ 中 ^ニ 白 ^ラ

被出仁海僧正 ^ノ 灌頂 ^一 是初胎後金也又

仁海被授円照 ^一 是同初胎後金也覺源被 ²⁹

授覺俊 ^一 是又初台後金也嚴覺以前既 ^ニ 初

台後金ニ行之一不レ依ニ今ノ此ノ通用ノ式ニ者又依ラン^㊲何レノ式ニカ乎見テ當時一旦ノ行用一勿レ三加ルコト無窮ノ謬難ヲ耳

一小野廣澤兩流有傍正欵事

(第11紙裏書)

又云長者聖寶僧正承和十四年隨真雅僧正出家得度年十^㊳

初屬元興寺円宗僧都並願曉律師等受學三論宗。貞觀十三年真雅僧正授無量壽法。年四十元慶八年源仁僧都授灌頂職位年五十三長者補任云長者益信僧正。初從明詮大僧都學法相宗後受真言於宗叡僧正。又隨源仁僧都寫瓶秘密云々

(第12紙)

或秘記云聖寶[◎]真雅入室秘藏弟子也

仍加^テ大師相承ノ聖教ヲイ付シテ源仁ニ曰ク聖寶成^{ナリイチ}出

之時可ニ瀉瓶ス云々益信者宗叡入室秘藏ノ

弟子也故ニ加テ法全相承ノ正教一依ニ付シテ源仁ニ曰ク益

信成立ノ之後可ニ傳付云々仍不レシテ違セ二兩僧正⑧

遺言一而授之一畢云々已上覺乘僧都血脉記中引之

就之一醍醐流ノ中、或仁ノ說云源仁受ニ真雅⑧

宗叡ノ両傳ヲ以ニテハ真雅ノ傳ヲ授ニ聖寶ニ以ニテハ益信

宗叡ノ所傳ヲ授ニ益信ニ仍廣澤ノ流ハ非大師醍醐

御傳ニ云々今ノ所存ハ非ス如ニハ此ニ両流俱ニ大師ノ御傳

也又益信聖寶俱ニ被受宗叡ノ傳ヲ其ノ中ニ

聖寶ハ為シテ真雅入室ノ弟子ト御受法源仁受

真雅ノ遺言ヲ大師相承ノ灌頂大事獨リ

授ケ聖寶ニ小野一流相傳之并ニ大師傳持ノ

聖教本尊悉ク被三傳ニ付聖寶ニ訖所謂鳥号機御藏

羽ノ寶藏ニ所ノ被ニ納一四合八合ノ之内也四合者大師御聖教也八合者貞觀寺般若寺石山

延命院各一合并ニ仁海僧正聖教四合也就中御遺告ハ被載宗ノ秘曲一輒不可披見一之由嚴誠分明也而ルヲ御筆ノ正本獨リ傳ハテ

(第13紙)

但此事猶可糺見或本與書仁海僧都被借取賴尊所持御案。若件本被入小野聖教款

小野流ニ正ク大師四合ノ御聖教ノ内ニ有之一根本被納東寺入經藏款

何況能作■本尊ハ一宗ノ重寶也是又³⁴

小野一流ニ相傳之一為シテ朝ノ寶ト同ク被納ニ鳥羽ノ

御倉^倉ニ於廣澤ノ流者頗無如ノ此レ之事也欽法³⁵

流ノ規模何事如之哉又高祖奉テ勅³⁶一

於神泉苑ニ有祈雨事^{被修請雨經法}一真龍^{親リ}現シテ形ヲ影³⁷示形^一親現池中^一

迎奇代ノ珍事、一宗ノ嘉模也是又被載

御貴告披被可見之彼両師勤行ノ ■

即是請雨經ノ法也此ノ法相承獨リ在小野一

法驗云其ノ後於彼流者且々不行之代々
法驗一々其ノ後於彼流者且々不行之代々

小野ノ流法修輩勤行之毎度施ス法驗彼蓮

臺ノ僧正相承是又被受般若寺ニ欽非法
流ノ嫡弟故不盡微致仍無法驗欽凡如法

愛染如法尊勝仁王經秘轉法輪ノ法等獨

小野一流相傳之大御堂高野御室自合了入小

野ノ室ニ有御相承給以來廣澤流又相承

之一然則云宗大事ト云法奧旨秘法大法ト云本尊

法奧旨

40

×云聖教一偏既以傳二既以傳二小野ノ一流一恐クハ可謂二法流ノ正嫡一乎豈不稱⁽⁴³⁾

(第14紙)

若無同執者誰レノ人生ニ疑乎⁽⁴⁴⁾

問仁和寺井院住光明壽院御室御付法也禪覺僧都記云小野流玉石相雜云々所仁和寺⁽⁴⁵⁾

謂玉者大師御傳也石者宗叡傳也所謂不等

葉ノ血脉大師處々ノ尺ノ中ニ所不見也是可シ御入後宗叡⁽⁴⁶⁾

唐僧正傳ナル而ルワ金石相濫スル故ニ以之用フ大師相傳ノ⁽⁴⁶⁾

血脉ニ是又蘇悉地ノ相承ハ大師御傳ノ中無之

是又後入唐ノ傳也大師相承ノ印信ノ中ニ書加之

豈非錯亂ノ謂乎是又延命院作胎藏

界次第依法全ノ青龍儀軌一彼軌ハ後入唐ノ

請來也何ソ用テ之ニ大師相承兩部大法ノ隨一ト

可致依行ヲ乎廣澤流ハ用フ大師御作梵字ノ

胎藏ノ次第ヲ是
前後相渉ル三凡諸尊瑜伽傍正相濫シ

是皆玉石相雜ハル之謂也尔者廣

澤流為大師ノ正傳一欽如何

答禪覺カ記述

法流ノ元由一恣ニ加ニ謬難一頗不足二

故ハ

×

ヒウ

恐ハ

×

47

會通一法皇^欽空長和親王高野御室北

院御室代々入小野ノ流一受法一存礼一為シテ末學一ト

御マス

誇^チ小野ノ流一眞意頗難測一禪覺カ早世⁴⁸

者欽

門室給フ

具支式ニ所載

依如ノ此ノ事一欽抑不等葉血脉事不限二小⁴⁹

野一流一廣澤ノ流ニ又有之一所謂蓮臺僧正授

（第15紙）

延命院ニ血脉是其ノ證也尔者廣澤流又非

×××

×××

×××

×××

×××

×××

×××

×××

×××

×××

×××

×××

×××

×××

×××

大師御傳一欽凡此事流々所存格別不^{シテ}盡ニ

巨細ヲ加ル難一恐^{クハ}可レ謂ニ僻執ト

次蓮悉地事

是又大師相承ノ所見非一一重々有子細一事也

以テ不ヲレ知一ヲ稱ニ非ト是レ愚ノ至リ也欲ニ知一者入テ習二之若

廣澤ニ無ニ此ノ傳者是レ又不盡法ヲ失也次ニ胎

藏次第事小野ノ流ニハ金剛界ニハ用神樂

岡ノ次第一胎藏界ニハ用延命院次第ニ胎

流ニハ兩界俱ニ用延命院次第一先付テ金剛

界ニ賢劫ノ十六尊并廿天印明事大師ノ御傳ハ

一印ニ用丸字ヲ神樂岡延命院ノ次第ニ所載一

50

無相違後入唐ノ傳ハ十六尊廿天各別印明也

法皇金剛界御次第二被載此ノ各別ノ印明ヲ

恐クハ是ニ非玉石相雜ル故次ニ胎藏界本儀軌

51

東寺相承説相髣髴也代々以口傳一行シ用ル

爰ニ青龍儀軌盡ス法ノ巨細一ノ大師相承ノ口決ト

52

大畧無^旨相違一故引^テ其^ノ^レ同^{スル}被^作次第^ヲ以^之一

不可為過失ト平
×不可為過失ト平
若用^ニ青龍儀軌^一故^ニ為傍流^一者

廣澤流又可為タル傍流^一欽天曆七年蓮臺

(第16紙)

僧正書^ニ与^{フル}遍照寺僧正^ニ受法^ノ目錄云胎藏

青龍義軌題也

界 大毗盧遮那成仏神變加時經蓮^⑮

花胎藏幙幢幖幟普通真言藏成就瑜伽

儀軌三卷 同二年歲次戊申二月六日丙戌^{背宿}日曜

於宮中真言修法院傳授了^云廣澤^ノ

流^{二八}以青龍^儀軌^一為^{スル}台藏界[/]傳授^ノ本^ニ儀軌^ト所見^書^⑯

分明也何^ニ況^ヤ法皇御製作^ノ胎藏界[/]次第

正^ク依^ル青龍儀軌^一是又^{可稱}傍流^一欽如何

一 義範俊相論事[◎]

野澤小野門流内両流ノ中以小野ノ流ヲ為スル大師以来嫡々相承ノ正^々_◎

縁ト誠非ス無キニ其ノ謂一於小野流ノ中一醍醐勸修寺^両

學雖争嫡末ヲ去承暦二年義範々俊就^テ

×^{傍正}_{執務職}然^ニ番訴陳^{ツカイン}之日法流ノ嫡末各被^レ

[◎]

×未^{門人}

申所存一範俊僧正得理之間彼曼荼羅寺

并師資相承本尊聖教等悉^ク住持

管領^於曼荼羅寺^ニ者^{被^三}讓^リ進^セ高野御

^{範俊}

室^{以来}任^ニ彼讓^一于今^ニ御管領既^ニ送^ニ數廻ノ星

霜^ヲ訖^メ於本尊正教^ニ者^{被^{進納}}安置^シ鳥羽ノ御藏^ミ

[◎]倉[◎]

勸修寺長吏嚴覺大僧都為^{シテ}藏司^{シト}一

相共与勅使相共開門其儀于今不依從尔以降

古
61

×

然則

改

一

小野ノ流ノ正縁獨リ在ニ範俊ノ法流ニ

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

若无勅許者豈可被證管領乎

テ無二相違

鳥羽ノ御藏ノ本尊聖教

⑥

×無二相違

鳥羽ノ御藏ノ本尊聖教

⑦

勅修寺長吏

奉勅毎度

出入取与是又朝

■

⑧

勅許無相違一故也後白河院院御代大師

御聖教ノ中二合可被渡蓮花王院ノ寶藏

⑨

之■由被下院宣了宛所ニ云勅修寺○

⑩

阿闍梨御房云々是雅寶ノ事也

累代ノ朝議

儀者豈及如此一沙汰一平天下一同且以

敢無相違偏執末學恣ニ致謬難一頗足

當

×無子細一醍醐ノ末

一於範俊僧正有嫡末事

門流

先師僧正御物語云予先年關東居

住之時對面有助僧正彼僧正申云

(第19紙)

小野流ノ正縁ハ是仁和寺ノ御室ニテ御也其ノ
故ハ義範々俊ノ相論在リ小野ノ曼荼羅寺ニ
而ルヲ依テ白河院ノ仰ニ範俊僧正以小野ノ流

被授申^{高野御室覺法}親王ニ即被^三讓リ進ニ彼ノ

曼荼羅寺ヲ訖^ス尤為正嫡支證^一由真光之

院僧正禪助被申之云々予答云彼ノ曼

荼羅寺ハ非ニ往古ノ御願寺ニ小野僧正始^テ建

立之ニ相承ノ道具本尊悉安置此寺ニ成

尊範俊相屬^續住持為^{以高野御室}親王ニ令存

法流ノ嫡弟ト者何師資相承ノ本尊聖教

等不^レ讓進之^被乎後朱雀院御代被下

官符^一云弘法大師第八代ノ弟子仁海傳授ノ

法門文、付属ノ道具纔ニ持シテ一身心一身

住ニ此ノ巖一仍テ一門之内撰才操一欲レ守護一云々

(第20紙)

承暦訴陳状ニ
被引載之
於曼荼羅寺者廣澤ノ正縁⁶⁸

入小野ノ門室ニ御受法為タリ未代ノ龜鏡

其故

為レ顯センカ師資ノ之儀ヲ雖被讓進之至二法

文道具ニ者不被讓進之還是隔

心ノ所見也仍彼ノ法門道具納鳥羽ノ寶⁶⁹

藏ニ被申付藏司於嚴覺僧都了ス⁷⁰

從尔一以來代々長吏勸仕此役於藏

司代一者慈尊院ノ門跡數代隨其ノ役

然者於範俊僧正ノ下ニ者勸修寺ノ一流為正縁⁷¹

条是又無異論一事也于時有助僧正無

重タル疑一大畧屈伏云々

一 勸修寺流血脉事

仁海僧正^{初住醍醐寺}_{後移住}被住^二小野曼荼羅寺^{ニ故}自此時一

始^テ小野ノ流トハ者也仁海^{ヲハ}号シ小野僧正ト成尊^{ヲハ}稱^{ヲハ}

小野ノ僧正^都範俊^{ヲハ}号ニ後ノ小野僧正ト嚴覺^{ヲハ}僧都^都為勸修寺別當^{ヲハ}

俊^ニ後名^{クル}勸修寺流トハ者也嚴覺^{ヲハ}也嚴覺^{ヲハ}僧都^都為勸修寺別當^{ヲハ}

(第22紙)

子弟雅寶但シ雅寶未入壇ノ間於ニ長吏

職^ニ者^ニ雖被讓与之^ニ於ニ法流^ニ者被預置行海

法印^ニ了任^テ法務ノ素意^ニ行海授雅寶^{ヲハ}應保^ニ於勸修寺勝^{ヲハ}福院^{ヲハ}

文治年中^{于時}入滅之後^ノ時^ノ為寺家^ノ別當^{ヲハ}

々々法印^ニ授成寶僧正雅寶^{ヲハ}十世^ニ之^ニ

(第23紙)

間去^{シ法未盡成寶}文治六年四月十九日^{成寶重}對^{ニシテ}興然阿闍^{ヲハ}

梨ニ受印可^ヲ_{天仁元年更ニ傳秘旨}_{對仁濟アサリ更傳密印}_仁
×灌頂一傳秘決一成寶僧正安貞元年

十二月十七日入滅其時聖基僧正廿

四歲道寶僧正十四歲俱以^テ不及入壇灌頂

仍雅寶相承并仁濟僧正^{相承}法流ノ大事

悉被預置榮然大僧都可授彼兩人之由

被申置之了仍榮然大僧都寬喜

二年四月五日授聖基僧正延應元年

八月九日授道寶僧正聖基ノ弟子勝信

僧正建長六年四月五日^受傳法灌頂^ヲ於

榮然ニ文永三年十一月廿六日□□受秘^ヲ

密灌頂於聖基僧正是榮然大僧都入

滅ノ後也仍榮然僧都為三代長吏師範

被^奉_授申 灌頂^ヲ之日以理明房阿闍梨ノ相傳^ヲ為^{シテ}

本ト被^授之^一了灌頂受職血脉相承^ハ作法⁽⁸⁾

灌頂^ヲ為^{スル}本ト故也例^{セハ}如下 高雄一品ノ御所性仁御

法流^ヲ被^ル、預置真光院前大僧正^{〔禪助〕}之刻^ミ依^テ

無^{キニ}作法灌頂^一被^{レバ}、^{〔カツカ〕}繼^中血脉於開田准后法助如^ノ此

例自他流^ニ多之^一不可為恠^ト矣

問若尔者勸修寺流^ハ雅寶成寶代々正縁[、]

血脉^ハ断絶^{スト}難^シ申輩有之^一尔者如何

答此事太不可然^一隨^テ時縁^ニ作法灌頂^ノ有^一無

自他流^ニ多之^一依^之^一。不可云断絶^ト粗尋例於

他流^ニ廣澤流大御室^ノ性弟子寬^{〔觀音院〕}意大僧都⁽⁴⁾

為^{ニテ}正縁^ト被^授申中御室^ニ覺行 中御室御

早世ノ間高野ノ御室_{（覺法親王）}
中御室御弟_{（云々）}不及御灌頂_{（二）}
仍寬助大僧正為シテ大御室ノ御付法ト被授申_{（ト）}

御法流ヲ於高野御室ニ了或人云中御室御

入滅ノ刻被授置御法流於寬助其ノ子細_{（83）}

（第25紙）

中御室冊九日ノ御仏事ノ時寬助僧正被捧

願文ヲ一件ノ願文ニ被ト載_{（二）}其ノ旨趣一云々近クハ又如

先ニ云カ高雄ノ一品御所ノ御法流子細同前也是

皆代々相承依_{（シテ）}賞_{（シテ）}作法灌頂_{（ヲ）}■繼_{（ニ）}血脉_{（ヲ）}

所雖示血脉次第
是則且

法流正脉内證ノ密旨雖然内證ノ密旨敢不断絶之
正緣血脉也尔者廣澤流又可一云ニ□流断_{（84）}

敢不断絶一者也
絶一乎彼既ニ不尔此何ソ可尔之

（コノ間、三行分ホド空キ）

太常寺法皇

一 後宇多院勸修寺流御傳受事

先師御物語云後宇多院于時
御俗躰 依御

靈夢一四度次第等對勝信僧正一御傳受

之一僧正入滅之刻隨誰一可有御受法一哉ノ由
有勅問一僧正申云對榮尊ニ可有御受法云々
任彼遺言ニ有御印可ノ事一即進ニ印信一了

榮尊最後病惱ノ時被授僧正一宣下ノ尻

付ニ云御傳法ノ賞云々凡於傳法印信者去后妃採女ヲ断酒86

非律儀具足之人者概不可授

肉五辛ヲ受クル具足戒ヲ人ニ可授之一法皇御俗
躰ノ時無此ノ儀一上ハ縱雖トモ非スト作法ニ進スルコト
為御俗躰御傳法

傳法職位先朝御事也一受ニ可有斟酌一欵雖然一先師
祖師榮尊

既ニ奉リ授ケ之ヲ了仍後醍醐院御代予

又奉リ授ケ印可ヲ了ヌ所詮當流ノ所存ハ於ニハ俗

人ニ者作法ノ事曾以不可有之於印可ニ
者國王大臣求法ノ御志シ深重ニ御者可奉

(第27紙)

授之一但雖トモ為ニ俗人一若受ニ具戒一者傳法ノ
作法又可許之蘓摩呼童子經ニ云

但除テ僧服ヲ自餘ノ律儀ハ悉ク皆應行ス文
此一人ヲ為ニ其ノ■ト器ト枉ニ和面ニ勿重輕
コト法ヲ矣◎

(コノ間、八行分ホド空キ)

一 傳法院本願上人當流受学事

問御物語云彼上人被申念願スラク鳥羽院ニ云欲ハ、習ヒ極キハメント⑩

自他門ノ法流ヲ先ツ学ニテ東寺ノ流ヲ後ニ学ニセ
似タリ東寺ノ流末盡ナルニ仍先ツ欲フ学ニント他門ノ流即⑪
申下シテ 烏羽院ノ々宣付二覺猷僧正ニ受ニ三井ノ

(第28紙)

流^ヲ其後^ノ被受^ニ長承年中申院宣^ニ從^ハ寛信定海賢覺等ノ法匠^ヲ東寺^ノ流^一兼海上人記^ニ一本^ヲ

願上人ノ物語^ヲ云究^ニ性海^ノ渕源^ヲ者四人^一對^{シテ}此^レ欲^ニ習^ト傳^ニ法流^ヲ云^{キハムル}四人者勸修寺^ノ寛信法

務醍醐定海僧正仁和寺^{ニハ}兩法親王

高野^ノ御室、花藏院^ノ聖惠法親王^{云々}仍對^{シテ}

寛信法務^ニ受法其^ノ子細委細別^ニ記^レ之^ヲ有^レ印^ヲ

建治年中生年四十九^{久安年中}上人入滅之後兼海上人重豫勸修寺法務被受密印^ヲ

(第29紙)

一 小野三流嫡末事

先師御物語云故光譽^甲云寛信^ハ世間

吉祥寺僧正

宗意^ハ出世仍宗意律師為嚴覺僧都出世^ノ

嫡弟^{云々}予難^{シテ}云^ク嚴覺僧都^ノ聖教本尊

悉安勸修寺大經藏^ニ就^テ中^一嚴覺^ノ所^ノ習^一秘事

口決等納メ革袋ニ同被安置大經藏ニ悉以

被附屬セ寛信法務一了ヌ法務即至リ東寺務ノ^⑥

白河堀河鳥羽堀川

数代明主間尊勝間

長者ニ仁王經如法愛染王後七日秘法等^万

××××

勤仕之朝家ノ崇重人ノ所知也宗意律師

若シ為ニ出世ノ嫡弟一者何ソ不レ及如レ此沙汰ニ乎

凡宗意一代ノ間不レ應ニ^{キヨウセ}公請ニ對シテ法務論ニ^{モノ}不預朝貴頗非對論之限者^{モノ}故

末ヲ頗可レ謂ニ比興ト宗意ノ弟子実嚴ノ弟子律⁽⁸⁾補^テ師ノ時為シテ寛信法務ノ舉ト始付太元ノ法ノ阿

闍梨ニ上古ハ太元阿闍梨ニ雖レ至ニ寺務ノ位ニ中古

以來ハ^{彼アサリ}大畧^{タリ}為ニ非名僧ノ所役仍不及ニ加任等ノ沙汰ニ

而ル^ヲ兼惠僧正時始^{永仁二年二月二日/文永二年}其後^テ加任成惠僧正ノ時始^テ⁽⁹⁾

(第30紙)

任ス寺務ニ是皆近代ノ事也勸修寺長吏^{寛信}法務

以來。寺務長者次第相續是即法流正嫡。
東寺數代
 故也爭_ニ以_ニ宗意_ヲ可_レ稱_ニ嚴覺_ノ嫡弟_ト乎

同御物語云先朝御代御產御祈時隨心院

經嚴僧正可勤仕如法愛染王法_ヲ由申之_一可
 為何樣哉由被仰合之予申云龜山院ノ御
 代常葉親王御誕生_{トキハシ}ノ時了遍僧正可勤

仕如法愛染王ノ法_ヲ之旨申之_一間被_レ下_ニ院宣_ヲ

於若宮僧正_一信忠云了遍僧正望申可

為何樣哉若■御所存候者不能左右_{一々}_云₁₀₀

可被行_一由_ニ信忠僧正依被申_一了遍僧_{トキハシ}₁₀₁

正勤仕了他流猶以如此_一況隨心院乍

受小野ノ末流_ヲ閣_テ正縁勸修寺ノ長吏_ヲ競望

不可然_一之由申之_一此_ノ由_ニ重_テ被_三仰_二下

經嚴僧正_{ニカ}彼僧正申云勸修寺隨心院

俱ニ受テ範俊僧正ノ流ヲ同ク究ニ宗ノ淵源一更ニ不¹⁰²

(第31紙)

可有法流ノ傍正^{一々}如此^云申旨重テ被仰下之^一予申云隨心院ノ流ハ嚴覺ノ僧都^ノ¹⁰³

弟子増俊阿闍梨ノ流也對シテ寬信法務ニ

曾^テ不可^三申^ニ所存^ヲイシ^{イシ}去天養年中ニ法務

勤^ニ仕仁王^{康治勤仕如法尊勝法之時}經法^ヲ增俊^{タリ}為^ニ其時ノ伴僧^一隨^テ親嚴^而¹⁰⁴

大僧正為成寶僧正ノ門弟是皆存法流

本末ノ儀^ヲ故也閣^テ本流^一勤仕不可然^一由申

之^一了仍件^ノ御產^ノ御祈故長吏大僧正^一嚴^正^ノ¹⁰⁵

御勤仕了^{云々}

一 安祥寺流事

凡勸修寺安祥寺兩寺ノ々務往古ハ隨^レテ時^ニ

不定自深覺^一兩寺ノ々務兼帶深覺ノ弟子

信覺々々ノ弟子嚴覺三代相續嚴覺ノ弟子ニ¹⁰⁶
 有宗意律師一嚴覺入滅ノ時^以安祥寺并ニ
 ×以寺領郡家ノ庄等ヲ讓与宗意律師ニ両寺ノ¹⁰⁷
 (第32紙)

々務一人兼帶深覺以來為先規^之間宗

意律師又以安祥寺并郡家ノ庄^一讓還^返寬信

法務ニ了^ヌ但於法流^一者上野建ニ立シテ一處ヲ讓

与実嚴律師ニ了^ヌ實嚴律師為法性寺

殿ノ御祈ノ師一間為シテ彼ノ御願ト被三建立セ一堂ヲ

大勝金剛院ト也実嚴ノ^{弟子ニ}賴真阿闍梨成嚴

法印寛海法印兼惠僧正次第相續而ルヲ

兼惠僧正^{ノ時}持來^書状ヲ使者尋ニ^{カウツケノ}上野僧正ト仍テ

道寶僧正勸修寺長吏^ノ時可被許安祥

寺ノ稱号ヲ之

由彼僧正

■懇望ノ間

被許其稱号ヲ
宗躰ヲ

108

被許一了

於寺ノ

管領一者

勸修寺■

門跡令知行
109

無相違慈尊院致寺務代者也
即茲尊院代々為シテ彼寺ノ別當一
執行ヲ而上野坊并法流事¹¹⁰×
致寺務一者也就其ニ宗意実嚴頼真

成嚴法云法流ト云門跡一相續無相違一

成嚴法印ノ弟子ニ良瑜僧正^{寬海法印}

兩人有之一法流門跡俱ニ奉授良瑜僧

正ニ了^{然ニ}良瑜居住關東^{在鎌倉之間}寬海法印為シテ¹¹¹

(第33紙)

御留守ノ儀ト居^一住上野ノ坊ニ^{ニコニ爰}道寶僧正關¹¹²

東下向ノ時對シ良瑜僧正^ニ傳受安祥寺ノ流ヲ

良瑜僧正被仰一云以當流ヲ可レ為^ス本ト者云¹¹³

法流ト云坊舍ニ悉以讓与之云々道寶僧

正答テ云為勸修寺ノ長吏一者以勸修寺ノ流一可

為本ト此事難儀云々良瑜僧正再三

稱美仍良瑜被讓^{云法流云門跡}○賴助僧正一了¹¹⁴

賴助ノ■■成助慈助有助四代相續¹¹⁵

先代滅亡ノ刻有助僧正滅亡^{横死之後}ノ時先朝ノ御代

隆雅僧正■^テ綱^テ緬^ヲ旨^ヲ始^テ致^ス^而自^テ專^テ管^領一ト¹¹⁶

者也其レ以前ハ代々佐々目ノ門跡ノ留守ノ儀ト¹¹⁷

居住所謂寛海法印ノ下ニ兼惠僧正寛

伊僧正成惠大僧正光譽僧正隆雅僧¹¹⁸

正也光譽僧正ノ弟子ニ良伊隆雅兩人

有之一良伊宿老ノ間光譽僧正令讓与^{得尋}

良伊僧正ニ了^ヌ良伊無程一入滅ノ間依為¹¹⁹

同朋一讓与隆雅僧正一了

一 随心院流事此門流兼學靜譽阿サリ法流是親嚴

*受尊念僧都以後／代々／相承／之

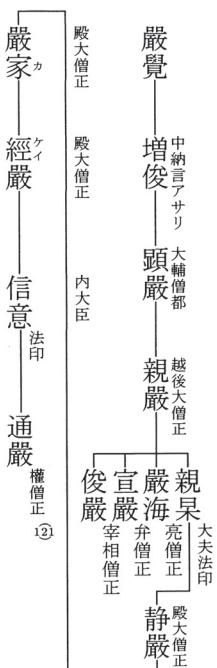
隨心院ハ小野ノ曼荼羅寺ノ別院家也中納言阿闍

梨増俊ノ住坊也後ニ九条唐橋ヘ渡シ了

親嚴僧正ヲ唐橋ノ僧正ト云ハ此ノ故也其ノ

後當時ノ隨心院ヘ渡也彼ノ法流ト門跡ト相

承ノ次第各別也先ツ法流ノ相承者



門跡相承次第

親嚴 嚴海 宣嚴 嚴惠 静嚴
左大臣法印

嚴家 經嚴 通嚴 照嚴

宣嚴院務ノ後無程入滅仍被讓嚴惠
法印ニ了ヌ彼ノ嚴惠法印ハ嚴海僧正
灌頂ノ弟子宣嚴ニモ受法云々關東五大

¹²²

(第34紙裏書)

靜嚴後宇多院御代正應二年補東一長

嚴家後伏見院御代嘉元三年補一長者

經嚴後醍醐院御代元德二年補東一長者曆應再任

¹²³

親嚴大僧正後堀河院御宇安貞二年七月廿八日私補任一長者

¹²⁴

嚴海僧正四條院御宇仁治三年補一長者

¹²⁵

(第35紙)

堂ノ別當也宣嚴僧正入滅ノ刻自關東一上

洛靜嚴僧正入滅室門跡等事有其抄汰被申

¹²⁶

付之後又下向ノ關東。刻親果法印可レ

下向之

奉^{タツヅル}加ニ扶持^ヲ之由被^{ハカラヒ}計申^一間彼^ノ法印辭^{シテ}之

寺ノ供僧^ヲ還住隨心院^ニ其後嚴惠法印

又■雖有上洛^一聊有惡名^ノ子細^一間^之陰^居世弘

誓院^ニ靜嚴僧正對^{シテ}親果法印^ニ可有灌頂^一之

由内々被^{ハカラヒ}計申^一間^之靜嚴對^{シテ}親果^ニ灌頂

受法了

一 親嚴僧正受法師匠事

顯嚴僧都^{兵部}尊念僧都^{阿闍梨}

■增俊流

靜譽流

125

親嚴同

浪澄^{文泉坊}律師

實任流

126

宿ノ小師也 法^{アサリ}行海流

隆榮^{理法房}

127

(第36紙)

二 金剛王院流事

127

「金剛王院ノ流ハ三寶院ノ權僧正ノ乳母子三密房」

「阿闍梨聖賢」流也賢圓威儀師子息兩人

「兄^ハ」賢覺法眼弟^ハ聖「賢阿闍梨也聖賢」弟^ハ

子^ニ攝津ノ僧都源運々々「弟子^ニ蓮花院僧」

都果海々々弟子ニ蓮花院僧正
×正賢海々々僧正傳法灌「頂^{ヲハ}雖受^ニ果^ハ遇^キ海^ニ「依」

無^{キニ}秘密灌頂^ノ作法^一源運^ノ「弟子雅^ハ西阿闍「梨^ハ」

被受之^一了賢海弟子實賢大僧正也「実」

賢^ノ時兼^テ被^{レル}習^ハ三寶院^ノ故^ニ常^ニ金剛王院¹²⁸

方^ノ三寶院^{トハ}也賢海僧正^モ遇^ニ果海僧

都^ニ被習三寶院流^一故^ニ始^テ被成醍醐座

主^ニ了^ヌ雖然^一云^ハ金剛王院^ノ三寶院^一實賢僧¹²⁹

被^{ラレシ}受^ケ勝賢僧正^ニ法流也實賢^ノ弟子^ニ松殿^ノ

僧正勝尊金剛王院三寶院兩流共^ニ被

受之^一了爰^ニ覺濟僧正^ハ者三寶院方^{ヲハ}

受實賢^ニ金剛王院方^{ヲハ}受勝尊^ニ覺濟

僧正隨分稽古ノ仁一非法流ノ正嫡一實^{雖為}¹³⁰

(第37紙)

賢ノ嫡弟ハ勝尊々々ノ嫡弟ハ北殿ノ法印実懃

光明寺殿下御息欵尔者光明峯寺殿下御孫也

也光明峯寺禪定勝尊存日ノ時悉授^ニ法流ヲ¹³¹

合^ニ御息

并被^{レテ}讓^二与金剛王院ノ々務^ヲ被^三居^ニ住仁和寺ノ

山本ニ了^ス而ルヲ 実懃法印早世ノ刻隨心

随心院靜嚴僧正

¹³²

院ノ靜嚴僧正ニ云法流ト云門跡ト悉^ク被讓与之^ノ
此事尚能々可尋之

¹³³

了^ヌ其^ノ故^ニ靜嚴僧正ハ円明寺禪定殿^下

¹³⁴

殿御息仍裏敷靜嚴ハイトコ也
一條關白實經公御息也裏敷法印ハ光明峯

¹³³

御息円明寺ハ光明峯寺ノ御弟也^ニ仍靜嚴^ハ
光明峯寺御息

¹³⁴

為^{メニハ}實懃^ノ■舅也以此ノ由緒一所及此沙汰^一

¹³⁵

也其後覺濟僧正入^テ静■ノ嚴ノ門下^ニ

門跡聖教等讓得了覺濟又云法流^一云

門跡一讓与隨心院嚴家僧正一覺親僧都

一四八

成立ノ時可与給一。由被申置一。間覓親對之。
嚴家僧正ニ受ケテ。印可ヲ。讓得之一了而ル。

嚴家僧正受印可讓得之了而

13

覺親[◎]早世[◎]間無付法[◎]人^一最後所學
実助僧正入室門跡聖教等悉讓与之

(第38紙)

但■■於受法灌頂一者對_二良融上人_二傳

受之

「覺親」

覺濟

卷之二

寶賢

卷之三

明倫彙編

開元寺藏書

勝尊 實佛 靜嚴 覺濟 嚴家

門跡并聖教相承次第
〔實助 覚救 澄法印〕

137

一四八

覺親 實助 実親^真

一 理性院流事

理性院ハ 賢覺法眼ノ 親父賢円威儀師ノ 住坊

也 賢覺ノ 假名理性房仍テ 名ニ 理性院ト 也 三宝院

權僧正三人付法ノ 中随分受法ノ 人也 勝覺付法

状ニ云ク 天仁二年三月二日 勝覺權僧正書キ 与ル

法眼ニ付法状ニ云勝覺、多年傳授之秘法數

代稟承之印契纖芥モ 無ク 遺漏一涓塵モ 無ク⁽³⁾

脫略一併以テ 教授云付法懃懃頗可謂規模ト

就中一上醍醐ノ 真言坊ハ 尊師ノ 御住處代々ノ

祖師於此地チヲ為ス 本處ト 勝覺僧正、賢覺法

(第39紙)

眼ニ被ルコツ
眼ニ被讓之又東安寺ハ延喜ノ御願也同讓⁽³⁹⁾

与之一又牛玉并ニ寶珠ノ曼荼羅大師
御筆云。一流ノ重

寶也同讓得之畢賢覺法眼ノ弟子ニ

寶心宗命ノ兩人有之賢覺記云寶心宗

¹⁴⁰

命ヲ為寫瓶^{云々}兩人俱ニ為シテ寫瓶ノ弟子ト窮^ム法

流ノ溯源^ヲ畢^ス而ル^ヲ先立^テ書キ与ヘ付法狀^ヲ於寶心

X

同ク讓与院務^ヲ之間寶心ノ後可讓宗命ニ之由

¹⁴²

依テ申置^{クニ}寶心書与ヘ付法狀於宗命ニ同¹⁴³

讓ニ与シテ院務^ヲ陰居高野ニ其間ニ宗命入滅

云法流ト云院務ト悉讓ニ与宗嚴^ニ畢就之

仙覺僧都ノ傳ニハ賢覺寶心宗命ト列之

觀高僧正ノ傳ニハ除^テ寶心ニ賢覺宗命ト列之

所ニ以除^ク寶心ニ者宗嚴僧都院務^ヲ時寶心

¹⁴⁴一

自高野一出^テ再可^三管ニ領院家^ヲ之由望之一
宗嚴不許之^ニ仍寶心与宗嚴^ニ不快之刻

宗命受法未盡之由以自筆一記之^ニ結句

(第40紙)

牛玉加時似外法^ニ不甘心^セ^一旨同^ク被貽筆^ヲ

云々彼宝心自筆記在■
金剛王院^ニ由實助僧正被申之 大畧於理性院流^ニ挿^{サム}

■敵心^一之間宗命自元^一為^{シテ}寫瓶ノ資ト窮^{ニルカ}法

流ノ渦底^ニ故^ニ除寶心^ヲ賢覺宗命ト列之^一也

所^ニ以加^ニ寶心^ヲ者仙覺僧都^ノ方^{ニハ}以^ニ付法狀^ヲ為^フ

本^ト故^ニ寶心既^ニ書キ与^フ付法狀^ヲ於宗命^ニ不可棄

¹⁴⁶

置之^ニ至^ニ老後^ニ以^ニ偏執^ノ所存^ヲ如^{ノシカノ}事書等[×]

¹⁴⁷

雖^モ貽^ニ筆^ヲ是^レ全^ク非^ニ正所存^一併^ラ老狂^ノ之^ニ至

也豈以^ニ邪^ヲ可^{ケン}破^ス正^ヲ乎仍寶心^ヲ列^{スル}付法^ノ正

嫡^ニ也 宗嚴僧都^ノ弟子^ニ行嚴法印行嚴

弟子^ニ觀俊法印々々々弟子^ニ宗遍法印^ハ

受法灌頂法流寫瓶^ノ仁也雖然^ニ理性院^ノ門跡^{ヲハ}

不讓得之^一彼^ノ門跡^{ヲハ}觀俊法印讓賴助僧¹⁴⁸

正ニ 賴助讓親助法印ニ 親助讓光助法眼一

宗遍法印以下代々為留守之儀ト一致理性

(第41紙)

院ノ々務一畢ヌ宗遍法印ノ弟子ニ有四人

觀高僧正後ニ道世号静惠房澄守法印仙覺僧都信助僧

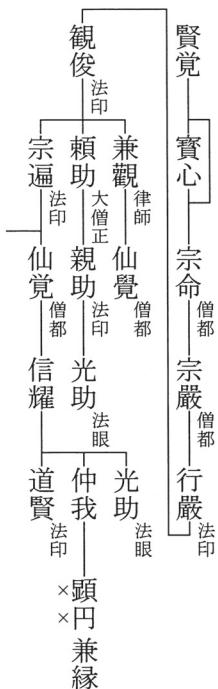
都是也觀高僧正弟子ニ俊覺僧正俊覺

弟子ニ性然法印也仙覺僧都弟子ニ信耀

僧正々々々弟子ニ道賢法印仲我法印光

助法眼等數輩有之一

法流相承





門跡相承

觀俊 賴助 親助 光助 信耀

(第42紙)

道賢
顕円
兼継

道賢法印入滅ノ時門跡ヲハ讓顕圓_二
兼継法流ヲハ

預ク仲我ニ々々任テ道賢ノ遺命一授ニ灌頂

於顕圓_二了_ヌ
兼継

一理性院流仙覺觀高嫡末相論事

龜山院御代欽權右中弁宣房為シテ奉行ト仙

覺觀高相論法流ノ嫡末ニ如キハ者仙覺カ訴狀一者

宗遍法印遺弟ノ内仙覺獨得付法状了ヌ

所謂聖應二年正月十三日付法狀是也

¹⁵⁰

理性院ノ秘傳ハ牛黃加時壽延經ノ護也

¹⁵¹

仙覺一人傳其ノ秘說ヲ而ルヲ觀高為ニ法流正
嫡由自稱之条不可然一^レ由申之如觀高

僧正カ請文者宗遍法印住坊毗沙門谷證聞院并ニ

本尊聖教等觀高悉相承之一付法寫瓶ノ

條誰人カ可疑之乎但シ仙覺カ所ノ帶スル付

法狀ハ還テ是傍流ノ所見也其故ハ三寶院

(第43紙)

權僧正付法ノ弟子三人中定海大僧正正ハ

嫡流也云門跡云法聖教ト悉讓与ノ上ハ別ノ

付法狀無之當流祖師賢覺法眼ハ依テ

非ルニ附属ノ嫡弟ニ為メニ受法所見ノ書キ与ハ付法

狀ヲ了ヌ今亦如是一觀高依テ為タルニ宗遍ノ嫡弟ニ

不及付法状ノ沙汰ニ仙覺帶^{スルハ}之ヲ者是偏非
嫡流ニ故也凡小野諸流ノ中理性院ノ流未

至ニ極官ニ不遂先途ヲ所望ニ此事也對シテ仙覺ニ
法流相論曾^曾非^テ所存ニ之旨陳之ニ雖レ及下如ノ此レ
相論ニ別シテ無ニ分明ノ勅裁^ク但觀高始^テ任シ
僧正ニ又加リ長者ニ勤ニ修後七日ノ法ヲ畢^ヌ祖
師賢覺法眼以来當流輩至ル官職ノ

極位ニ初例也是即觀高為宗遍^カ嫡弟ニ

由依テ被^{キコンメンヒカル}聞召披^一天許無滯^一者欽

一 同流牛黃相承事

仲我法印^{僧正}說云尊師般若寺 一定元果

(第44紙)

仁海成尊 義範勝覺 賢覺 云々

義範都^{舊記ニ所載村上帝号天香御門}
朱雀院御誕生ノ時尊

師被用此牛玉ヲ云々但時代相違歟

尊師ノ時延喜ノ御誕生歎朱雀院村上相當

般若寺ノ御代歎追可勘之

(第45紙)

舊記云尊師聖寶僧正天曆皇帝降誕之時加持之又待賢

門院御產之時三寶院僧正勝覺度々勤仕之又理性房法眼賢覺美

福門院御產行之又常陸已講隆賢建礼門院御產之時勤之

又當今中宮御產大納言律師宗嚴修之如此次第相承于今不絕也云々

(第45紙裏書)

私ノ此記天曆皇帝者指村上天皇然尊師般若寺兩祖

同此御誕生以前入滅人也延長四年村上天皇降誕云々般若

寺僧正延長三年入滅也尊師延喜九年七月六日入滅也

(第46紙)

一三寶院流事

153

三寶院ハ勝覺權僧正建立之門跡地也彼ノ僧正對シテ¹⁵⁴

三人ニ受法三人者義範々俊定賢也傍流ノ

輩我友之鉢トテ二卷ノ書有之一ノ号ニ勝覺ノ記ト傍流^輩勝覺ノ記ト¹⁵⁵

貴重之テウ是レ謀作ノ書也賀茂空觀上人遺第二觀乘房ト金剛王院流仍■

云聖法師ノ作レル書也勝覺ノ弟子定海大僧正¹⁵⁶

其レ以後元海美運勝■賢成賢道教

次第相承道教僧都早世生年卅七不及親快法印不及受職灌頂之間以印可ヲ授¹⁵⁷

令相承流秘法大法宗大事等了親快法印了於儀式灌頂依道教遺命者受深賢法印¹⁵⁸

畢ス親快ノ下ニ實勝法印親玄大僧正兩人

雖レ論スト法流ノ嫡末ヲ累代相承ノ聖教本尊等

親玄大僧正讓得之嫡流之條人ノ所知一也親

玄僧正ノシタニ覺雄僧正房嚴法印也入滅之¹⁵⁸

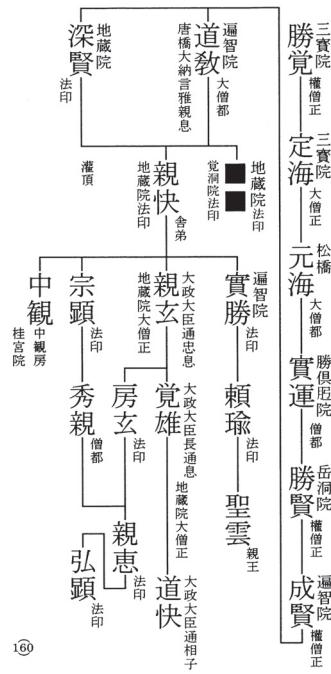
次第相承之又親玄僧正弟子

有之_一房玄入滅ノ刻聖教等讓_二与親惠法
印_二畢_又自兼_一印可受法_{云々}又実勝法印ノ

弟子賴瑜法印々々々々授_二申シ遍智院ノ¹⁵⁹

(第47紙)

聖雲親王并東南院ノ聖惠僧正_二畢_又



160

門跡相承

遍知院義範僧都建立之

行朝法橋 實海

義範 琳覺

定海 元海 実運

勝賢 成賢

道教 親快 實勝

三宝院

⑯

勝覺—定海—元海—實運—勝賢—成賢

道禪—道教—親快

憲深—定濟—定勝

道性

實勝

聖雲

聖尊

鳴瀧

成範孫

左大臣實雄公息

龜山院御房

(第48紙)

後宇多院—聖尊遍智院宮

親王

定任—賢助

大納言源任
大政大臣公守
大納言俊光息

賢俊

大納吉

⑯

成助

光濟資明

⑯

私云賢海僧正補_{セシ}醍醐ノ座主ニ之刻居住三寶院ニ依_{タルニ}為_ニ二座主坊也但於經藏者三寶院流門徒依申_ニ子細_ヲ賢海僧正不_レ管領之

偏_{ヘニ}道教僧都_ノ進退也而_{ルヲ}賢海僧正移

住ノ後件ノ院家焼失但於經藏者免其ノ災ヲ
畢^ヌ道教僧都入滅ノ[。]刻讓^ニ与親快法印^ニ于

時一憲深僧正補^{ニス}座主^ニ親快法印對^{シテ}憲深^ニ受
法仍^テ ■令^メ管^ニ領三寶院^ヲ以^テ二座主^ノ力^ヲ一可終^ニ造功^一
由種々^{再^ニ}雖被^申 ■之^一親快法印不令許諾^一

宣陽門院種々^ニ有^テ御口入^一修造^ノ後必^{返付}親快

法印^ニ之^由[。]告文^ノ狀^ヲ畢^ニ仍親快法印令^許^承

諾^一畢憲深僧正隨分雖致修造^一未終^ニ

造功一爰^ニ憲深以座主職^一讓与定濟僧正^ニ定

濟座主^ノ時終造功^ヲ畢^ヌ以營作^ノ勞^ヲ且^ニ稱有^{ヒト}憲深^ノ讓^リ

葉^ニ可^レ相續管領^之由^シ後嵯峨院御代申給[。]且^ニ募^{ハシマリ}定濟門[。]且^ニ得憲深讓[。]⑯

(第47紙裏書)

*二行目ヨリ始マル系図、ソレゾレ括弧内ノ僧名ノ裏ニアリ。

(勝覺) 左大臣俊房公息 (定海) 六条右大臣顯房息 (元海) 大納言雅俊息 ¹⁶⁵

(夷運) 勝覺舍弟 (勝賢) 信西息 (成賢) 櫻町中納言成範息

(夷勝) 左大臣公經息

(第49紙)

院宣畢 管領之 親快法印雖及詔訴一 定濟僧正 ¹⁶⁶

依為二

後嵯峨院ノ御乳母子

權勢無雙理

訴沉滯畢雖然一 實勝 聖雲聖尊讓

許相續者也定濟

弟子 鵠山院御子又号園伽井、宮也

¹⁶⁷

被讓進後宇多院一畢 門葉道性落墮後

¹⁶⁸

被讓進後宇多院一畢 於定任賢助等者

¹⁶⁸

令御留守ノ儀ト令居住一畢 真実令受

兩方ノ讓ヲ給者聖尊法親王也

(第50紙)

被下道教僧都院宣案 『已下一紙異本無之』

三寶院并安食庄早可被付成賢僧正

門徒於結緣灌頂阿闍梨者賢海已為當寺

之貫首有知法之名譽尤以當其仁者

¹⁶⁹

也此上兩方共存靜謐之儀可專寺役

由可被相觸門徒等者 院宣如此仍執達
如件

天福元年十一月廿九日修理大夫資賴
謹上 大納言僧都御房

道教僧都讓与親快法印狀案

讓与

三寶院事

右院家任先師僧正之意趣所令相傳也但故
道禪法印之讓狀無之頓滅故也雖無讓狀兼
日內契約之旨顯然事也仍所相承也非相傳
者誰人輒令領知哉仍親快法眼所讓与也為
向後不可有他妨之狀如件

嘉祐二年五月廿三日

親快法印讓与實勝法印狀案

醍醐寺三寶院并安食庄事

右件院家庄園等任先師僧都讓狀令傳領
遍智院之時可管領之處有子細依宣陽門院御
口入暫被仰付憲深僧正且有師弟契約之故其
子細等具見別狀仍僧正一期之後親快可執務之由
女院御平生之時已被仰置之僧正又進請文申定
畢而不慮沙汰出來定濟令押領遍知院之刻

剩當院家事任通円狀可讓定濟之旨稱有

院宣憲深僧正改先約不觸子細於親快忽令附屬

定濟之條沙汰様存外理不盡次第早申彼

^早^⑰

子細任道理可被領掌之仍彼證文等所讓与実

勝法印也縱雖沒後何不達理訴乎為後日注子細

之狀如件

正元々年十月二日

法印在判

『已上二紙異本無之』

(第52紙)

地藏院定海大僧正建立之

定纂 元纂 実運 勝賢 深賢

盛深セイシン 律師リョクシ 親快キンカイ 親玄キンセン 覚雄ケイウ^⑰

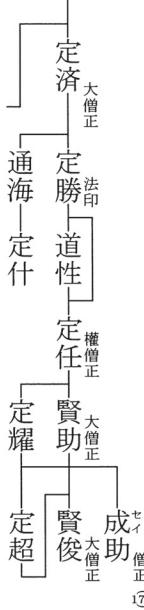
覺洞院ケイドウイン 勝賢僧正建立之

勝賢 成賢 道教 親快 實勝 聖雲

聖尊

一 報恩院方三宝院流事

(第53紙)



172

下向關東_一於彼境_一死去_ノ刻_。法流_ヲ_于預_レ

憲淳_一可授_二雲雅僧正_二之由申置之_一

畢_運雲雅僧正受法灌頂之間者任_テ

覺雅法印ノ遺命一本尊聖教等可讓付

之一處_ニ運_レ雲雅嫉_{シツト}妬_{シテ}隆勝道_順受法_{ノ事}₁₇₄

運雅拂怨嫉之所存不儀向背之間_レ令向背之間不及付法_ニ者也而_{ルヲ}後宇多院

御俗躰ノ之時對_{シテ}憲淳_一御灌頂仍報恩院并_ニ

本尊聖教等讓進之了道順僧正

為御留守之儀ト住持管領之隆勝僧

正雖及訴詔終不達愁眉者也■₁₇₅

今度世上動乱建武以来隆舜僧正

申シ立_テ法流ノ由緒_ヲ為_{シテ}朝恩ノ儀ト拜

領報恩院_一於聖教等_ニ者道順僧正入

滅之刻被三申渡シ置二大覺寺殿一建武廻回
禄ノ時燒失了

次定濟僧正ノ法流事定濟弟子定

勝法印早世之刻通海僧正為教授ト

奉授灌頂於道性ニ号闕伽井ノ宮トナカラ
龜山院御子乍ニ楚忽一

御授法等有其沙汰一而ルヲ道性御落墮

之問定任僧正依為御乳母子預聖教ラ勤一⁷⁶

三寶院御留守ノ役ヲ了ヌ定任對シテ

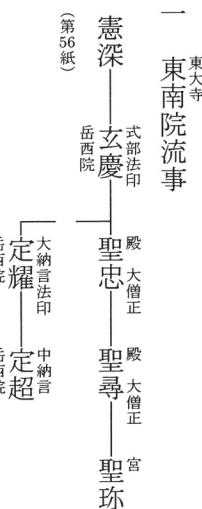
定勝一僅ニ受灌頂一許ニ者受法未盡之間對シテ通海僧

正ニ受傳之法一通海ハ憲深并ニ定濟ノ資也

賢助僧正對定任一受法未盡ノ事

等雖多之通海ノ弟子定什法印ニ受

法矣



憲深——玄慶——聖忠
岳西院

親快——實勝——賴瑜——聖尋
岳西院

(第57紙)

岳西院

¹⁷⁵

一 無量壽院流松橋事

無量壽院^ハ元海大僧都建立ノ院家也件^ノ

院家新造之刻被召請定海大僧正^ヲ之時

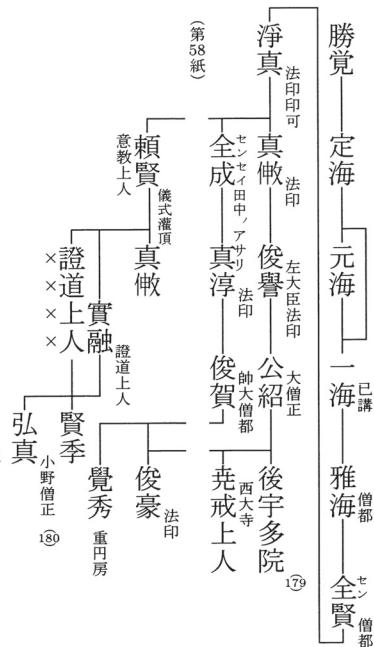
一海已講于時為^{タリ}垂髮^一定海於^テ當時^一所望

之^一出家^ノ後^ニ對定海元海^ノ兩人^ニ受法從

一海已講^ノ時^一名松橋^ノ流^{トハ}也是又法流与^血

門跡^一錯亂^ノ子細有之

法流相承



私云真倣法印宗ノ大事法ノ奥旨悉

受ヶ淨真法印ニ了ヌ雖然一不遂儀式灌頂ニ

間對^{シテ}意教上人^ニ受之^一了但^シ彼ノ上人ノ血

脉二八不為本一ト淨真法印ヲ為シテ一本ト鉤ニ血脉一ヲ也

門跡相承

元海乃至公紹——空應——賢季キ
182

私云空應不及受法灌頂一二只門跡許相

而ルヲ無呈牛ノ無量壽完燒夫於

184

大事ノ聖教ニ者无為也其ノ内重書ノ皮子

十七合預ケ高野ノ金剛三昧院長老證道実融上人一畢又即可受法灌頂^一。由約諾仍

灌頂ノ加行始行[○]五十個日許^二處^一之^及後宇多

(第58紙裏書)

* 「法流相承」ノ系図（第57紙）、ソレゾレ括弧内ノ僧名ノ裏ニアリ。

(賴賢) 高野安養院
(證道上人) 高野金剛三昧院長老
(弘真) 文觀房

(第59紙)

止公請一公紹僧正ノ法流御傳受ノ上ハ可有御之

授一×由云々
仍打ウチ二破リ
加行一了ヌ其ノ後空應無程ニ

入滅奉_三對_二後宇多院_二不及入壇灌頂_二者也
入滅之刻以_二無量壽院_一讓與賢季_二々々

微弱ノ間以門跡一寄進弘真僧正ニ々々以權

(186)

威一責還^{セメ返}證道上人所ノ預置一之聖教^ヲ刻^ミ

不受法流一之由證道上人支申^ミ間弘真僧正

對シテ證道上人受印可一彼ノ十七合ノ聖教請

取之一了而ル弘真僧正京都住坊燒失ノ

刻^ミ件ノ七七合ノ聖教成ナリ^{クハイシ}灰燼一ト了^ヌ可悲々々

(第60紙)

『已下三番異本無之但賢一之追加也』

一 静譽流事

範俊——静譽——增仁——仁禪——尊念小野淨如房
僧都 187
嚴覺

親嚴

一 勸修寺別當次第舊記云往古官牒
近代上東門院宣云々

律師或記云但非正別當為弥益持僧寺家執務云々

根本承俊勸修寺古事云承俊律師建立ノ堂在ニ本堂ノ巽角一

本是三間四面檜皮葺件堂天喜焼亡云々

濟高大僧都 延喜十年八月九日給官符年五十九
尊師弟子『東寺長者』

寺家舊記云延喜二年三月十六日任別當右大將

宣自此以後正補別當^{云々}

此說辟欵監遍覺欵貞晉天慶七年入滅也

¹⁸⁹

承俊弟子貞晉權律師

天慶七年六月廿一日補勸修寺檢校^{云々}

¹⁹⁰

或記云天慶五年十一月廿五任^{云々}

^{五イ}

天慶七年七月八日入滅年七十二^X

承俊律師入室受法灌頂人也補貞觀

寺別當

濟高弟子八條大將息

通覺大法師

天慶七年六月廿一日任^{官符元少別當}年卅五在任十一年

『東寺凡僧別當』

東寺入寺凡僧別當也

遍覺弟子教實親王息

雅慶大僧正

天曆九年四月三日任^{官符}寬朝舍弟也¹⁹¹

『長者』

長和元年十月廿五日入滅年八十一

(第61紙)

濟信大僧正

長和元年十月任雅慶讓此人雅慶
『長者』

入室寬朝僧正灌頂弟子¹⁹²

或記云長和二年任^{云々}此說為正大夫宣

案文有之長元三十六十一入滅年七十七

長和二年二月二日補勸修寺別當大夫 宣云故大
僧正雅慶替以權僧正法印大和尚位濟信宜為

勸修寺別當者正文
在寺

『凡僧別當』
光慶阿闍梨 長和四一七一廿二一任上東門院宣在任十五年

閑院相府之門人子也東寺入寺凡僧別當也

信覺僧正 長元三年十月十日任光慶讓東宮宣

『長者』

深覺僧正灌頂受法弟子也此人仁海重受弟子也
應德元年九月十五日入滅年七十四在任五十四年

『同』
嚴覺大僧都 應德元年十一月廿三日任 信覺僧正灌頂弟子

後受範俊一一

保安二年潤五月八日入滅在任卅七年

『同』
寬信法務 康和五十、廿七、始任權別當年二十
先例不見云天仁三、六、四一讓任別當年廿八

雅寶法印 仁平三年三月任

願賴卯息

別當准方卿息

成寶僧正

壽永二、十月卅、任

『同』

松殿大殿孫大覺寺左府隆忠公息号施無畏院又号南谷大僧正

聖基大僧正

安貞元、五、四日任

八条左大臣良輔公息号安祥寺

嘉貞三年

建長六年十一月還補

四年春聖基讓建長◎四

×四

193

道寶大僧正

建長元、五、四日任

建長六年十一月還補

文永七年還補

光明峯寺禪定殿下息号慈金剛院又号福岡僧正

勝信大僧正

建長五年十一月十一日任聖基讓

『同』道寶

文永七

勝信大僧正

九条前關白忠家公息号若宮僧正

信忠大僧正

弘安九、

勝信讓

『同』教寬大僧正

弘安九、

勝信讓

後伏見御子号後安祥寺殿胤

二品法親王

寬一

常盤井一品式部卿親王御子信

無品法親王

尊一

194

本院第二皇子
無品法親王 興一

『已上異本無之』後日勘舊記追加之了賢一注之

『以下異本有之』

勸修寺建立事

諸堂諸院草創仏事法會等

興隆次第具見勸修寺古事件

記為房朝臣記并寬信法務

記復為一卷也

一卷復為一卷也

(第63紙)

金堂延喜御願本尊
五大尊

大塔 延喜^后母勸修寺内大臣
度者被置之^一仍當寺^{代々}長吏寬信成

寺^一以前ノ建立也

延喜五年被下 官符^ヲ真言三論ノ両宗

寶等^{聖基道宝勝信忠等}兼^{ニシテ}二論^ヲ應^シ隨^ニ公請^ニ了¹⁹⁶

(奧書)

文和二年癸巳五月十七日於洛東
吉祥園東對師主上綱以口筆
抄之了自去月比漸々馳筆

同聽慈尊院僧都俊然院主上人也
法流之由來相承^之嫡末尤以為要
樞常置座右可暗記之而已 賢寶生一

(奧卷・修補識語)

延寶五年仲秋下旬加修復之者也
果快

注

- (1) コノ行、同筆ニテ行間ニ補入。
- (2) 否、「欵」ヲ墨抹シテ右傍書。
- (3) コノ行ヨリ次行ニカケテ付箋アリ、後筆ニテ「此本有別欵表題与内題前後錯／乱之一本覽者着眼」ト記ス。
- (4) 二、ハジメ「三」ヲ書キ、上二画ヲナゾリツブシテ「二」トス。
- (5) 尔、実際ノ字形ハ「尔」ニ近イガ、便宜上「尔」トスル。以下同。
- (6) 稠、不明ノ偏ニノギヲ重書。
- (7) 縱ノ上、挿入符アルモ対応スル挿入字句ナシ。
- (8) 僧、「寺」ニ重書。
- (9) 灌頂ノ下、捨仮名「二」オヨビ返点「一」ヲ墨抹。致（次行）乎、墨抹。
- (10) 由、不明字ニ重書。（義ノ捨仮名）■、「三」ヲ墨抹。
- (11) （双注左行）■、「藏」ヲ墨抹。
- (12) 二位、ゴク淡イ墨ニテ抹消。（注遣ノ返点）「二」「三」、ママ。
- (13) 可、ナゾリ。
- (14) 頂ノ下、返点「一」ヲ墨抹。
- (15) ■：■、不明字三字分ホドヲ墨抹。
- (16) 傳法ノ式故、（通用スルカ之ヲ）故云「通用」ヲ墨抹シテ右傍書。云、「也」ニ重書。但シ、云・也ノ先後ハ逆トモ見ユ。
- (17) 摹、墨筆濁上声点アリ。□□、墨カスレテ不可読。
- (18) （本文行）欵、墨抹。
- (19) 番、ナゾリ。
- (20) (21) 双注全体、墨抹。
- (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40)
- 載、ナゾリ。
（挿入句）撰■、ハジメ「撰」ノ如ク書キ、墨抹シテ上ニ「撰」ヲ書タ。
欵、墨抹。
大、ナゾリ。
製、「作」ニ重書。
來、ナゾリ。
コノ行、行間ニ補入。
（上ノ）■「被レヨリ」ヲ墨抹。（下ノ）■、「申サ」ヲ墨抹。結果トシテ、ハジメ「法皇に受け申されしより以來」ニアツタ文ガ、「法皇に受け奉りしより（自）以来」ト改メラレタコトニナル。
円照、円ニ墨筆去声点、照ニ墨筆濁上声点アリ。
金、ナゾリ。
コノ裏書、「又云」行ガ第11紙ト第12紙トノ總目上ニアル。「又云」ヨリ墨線ヲ引き出シ、最終行頭「宗」ノ左傍○印ニ至ル。移動符カ成、墨筆濁去声点アリ。
云、「説」ノ捨仮名「二ハ」ニ重書。
■「聖」カ。
欵、墨抹。法、墨線ニテ「於」ノ前ノ挿入符ニ接続。哉、移動符ノ如キ墨線アルモ移動先不明。
現形影、墨抹。
云々、「欵」ヲ墨抹シテ右傍書。
コノ行、墨抹。

獨、ナゾリ。

(挿入句) 了、墨抹。

(傳ノ捨仮名) ル、「ヲ」二重書。

コノ行、墨抹。

禪覺右注、「仁和寺」ニ墨筆合点ヲ施シ、サラニ全体ヲ墨抹。

故、「平」ニ重書。

(禪覺右下ノ捨仮名) カ、墨抹。(迷ノ捨仮名) テ、「三」ニ重書。

(本文行) 謬、言偏部分ナゾリ。

謗、ナゾリ。眞、「眞」ニ重書、ソレヲ墨抹シテ「祖」ヲ右傍書。

欽、墨抹。

神・所、ナゾリ。

豈、墨線ニテ「是」ノ下ノ挿入符ニ接続。(故ノ下) 欽、墨抹。

(細ノ訓点) ヲ・一、墨抹。

製・ソノ挿入符、墨抹。

青龍、墨短線ニテ「大」ニ接続。

(流ノ捨仮名) ヲ・ハ、墨抹。

小野門流内、墨抹。

(本文行) ヲ、不明字ニ重書、サラニ「ヲ」ヲ右傍書。

(羅ノ捨仮名) ヲ、墨抹。

正、ママ。倉、ナゾリ。

從尔以降、墨抹。

遂、ナゾリ。聖断、聖ニ墨筆去声点、断ニ墨筆濁平声点アリ。

(言ノ捨仮名) ハ、墨抹。

遂、ナゾリ。聖断、聖ニ墨筆去声点、断ニ墨筆濁平声点アリ。

(言ノ捨仮名) ハ、墨抹。

遂、ナゾリ。聖断、聖ニ墨筆去声点、断ニ墨筆濁平声点アリ。

(言ノ捨仮名) ハ、墨抹。

遂、ナゾリ。聖断、聖ニ墨筆去声点、断ニ墨筆濁平声点アリ。

(言ノ捨仮名) ハ、墨抹。

(御室ノ捨仮名) ニ、墨抹。

鳥、ナゾリ。

■、「議」ヲ書クベクシテ言偏ノミニテ止ム。

少納言入道、ハジメ「由」ノ上ノ挿入符ニ墨線ニテ接続、ソノ挿

入符ヲ墨抹シテ「由」ノ下ノ挿入符ニ接続。

(挿入) 寺・(澤ノ下) 挿入符オヨビ挿入字、墨抹。

法門、ママ。「法文」ナルベキカ。

了、ナゾリ。

(僧正ノ下) ノ、「三」ニ重書。一、ナゾリ。

(流ノ捨仮名) ハ、墨抹。

僧都勸修寺別當、墨抹。

(名ノ捨仮名) ル、墨抹。

(右注) 應保、墨線ニテ「行海」前ノ挿入符ニ接続。

(右注) 依為受法未盡成實、墨抹。

(右注) 應保、墨線ニテ「灌頂」ノ頂トノ行間、「傳秘

旨」ヲ挿入。(同ジク右傍記) 天仁元年更傳秘旨、墨・朱抹(両線引)、

ソノ右傍ニ「建久七年七月」ト注記。

(右傍記) 「印可」ノ可ト(本文行)「灌頂」ノ頂トノ行間、「傳秘

旨」ヲ挿入。(同ジク右傍記) 天仁元年更傳秘旨、墨・朱抹(両線引)、

- 繼血脉、繼血モ墨抹力。（右注）所、墨抹。（右注）次第、捨仮名
 「ヲ」返点「二」アリ。
- 、虫損。
 □、虫損。
- 去、振仮名「サケ」アリ。去后妃ノ断酒・（右傍記）於者、墨抹。
 採、ママ（采）。
- 進・傳、墨抹。（左注）為御俗躰御傳法、墨線ニテ「進」ノ上ノ挿入符三接続。
 信、捨仮名「ノ」ヲ墨抹。先師、墨抹。
- 重、存疑。
 極、墨抹。
- 盡、右肩ニ小合点ノ如キ墨点アルモ趣意不明。
 （人ノ返点）一、墨抹。
 （別ノ捨仮名）二、墨抹。
 豫、存疑。
- （付属ノ捨仮名）セ、「シ」二重書。
 （挿入句ノ右注）近衛、捨仮名「ト」アリ。
- （厳ノ捨仮名）ノ、墨抹。
 （右挿入句）文永二年、墨抹。成、フリガナ「セイ」アリ。
- 若、不明字ニ重書。
- 行、フリガナ「ヲコナハサル」アリ。
 コノ行、紙継目ニ乗ル。
- （嚴覚ノ捨仮名）ノ、墨抹。
- 僧、ナゾリ。
- 繼血脉、繼血モ墨抹力。（右注）所、墨抹。（右注）次第、捨仮名
 「ヲ」返点「二」アリ。
- （左注）嚴寛、墨抹。
 「ヲ」返点「二」アリ。
- 子、墨線カカラザレド墨抹ナルベシ。
 郡、「群」二重書。
- （挿入句）稱、墨抹。
 （了ノ捨仮名）又、墨抹。
- （大僧正右下）嚴、墨抹。コノ上ニ挿入符アリ。（左注）嚴寛、墨抹。
 線ニテソノ挿入符ニ接続。
- （行末）子、墨線カカラザレド墨抹ナルベシ。
 郡、「群」二重書。
- （挿入句）稱、墨抹。
 執行ヲ、墨抹。
- コノ行、紙継目ニ乗ル。在鎌倉之間、墨線ニテ挿入符ニ接続。居住之間、墨抹。
- （左挿入句）佐々目、墨線ニテ挿入符ニ接続。
 （賴助ノ捨仮名）ノ、墨抹。
- 不明字ニ「賜」ヲ重書。
- （右挿入句「門跡」ノ下）為、墨抹。ソノ下ニ「ニ」ト見ユル字画アリ。
 ヨノ行、紙継目ニ乗ル。
- （双注左行）*、未詳。代々、本文次行ノ下ニ位置ス。
 （嚴家、經嚴ノ右傍注）殿大僧正、ハジメ「殿僧正」、サラニ「大」ヲ右傍記。
- ヨノ行、紙継目ニ乗ル。

- 123 コノ裏書、オモテ面ノ「承」次第格別也」、「親斎僧正」ノ裏二アリ。
- 124 私、存疑。
- 125 コノ裏書、「門跡相承次第」親斎・巣家ノ裏ニアリ。(親斎)一長、不明字ニ重書。
- 126 浪澄、ママ(朗澄)。
- 127 126 コノ一紙、右端欠損。八行目マデ各行「内ノ字句ハ裏打紙ニ補写シテアリ。
- 128 (賢ノ捨仮名)ノ、墨抹。(被ノ捨仮名)ハ、墨抹。
- 129 僧ノ下、「正」脱ナルベシ。僧、擦消ノ如クモ見ニ。
- 130 コノ行、紙継目ニ乗ル。
- 131 130 (右注)円明寺ノ、墨抹シテ本文双注「光明」ニ墨筆合点ヲ施ス。
- 132 (存日ノ捨仮名)ノ、墨抹。
- 133 132 (右挿入句)随心院、墨線ニテ挿入符ニ接続。
- 134 (右注)此事尚能々可尋之、墨線ニテ「其故」ニ接続シテ墨抹。(本文行)円、左傍ニ墨筆ニテ「生ヘシ」トアリ。(右注)御息也実歟法印光明峯、墨抹。
- 135 (行頭)御(下三字目)仍、左傍ニ墨筆ニテ「生ヘシ」トアリ。(右注)殿御息ヘイトコ也、墨抹。(舅ノフリガナ)ヲチ、墨抹。
- 136 135 134 (早世ノ捨仮名)ノ、墨抹。(右挿入句)也、墨抹。
- 137 136 135 (救ノ下)法印、墨抹。
- 138 織、平声点アリ。芥、濁去声点アリ。涓、左側中央ニ平声軽点アリ。イズレモ墨筆。
- 139 東安寺ノ裏、墨筆ニテ「醍醐」トアリ。
- (三字目)宗、左側中央ニ墨筆平声軽点アリ。
- (窮ノ捨仮名)ム、「メ」ニ重書。
- 140 (置ノ捨仮名)ク、「二」ニ重書。
- 141 所以、墨筆合点ヲ施ス。
- 142 所以、墨筆合点ヲ施ス。
- 143 既、不明字ニ重書。
- 144 宗遍、両字トモニ墨筆平声点アリ。
- 145 助、ナゾリ。
- 146 然、「禪」ニ重書。法印、「僧正」ニ重書。
- 147 聖、ママ(正)。
- 148 廷、墨筆平声点アリ。經、墨筆濁上声点アリ。
- 149 云々、實際ニハ改行シテ紙継目左、第46紙上ニアル。
- 150 149 151 150 149 148 147 146 145 144 143 142 141 140 139 153 152 151 150 149 148 147 146 145 144 143 142 141 140 138 一・三ノ間、右傍ニ移動符ノ如キ符号アリ。マタ前行「又」ノ左側ニ通例トハ逆向キノ合点ノ如キ線アリ。トモニ墨筆。両線ハ接続セヌモノノ如シ。趣意未詳。
- 154 勝、右肩ニ墨筆ニテ「生」トアリ。
- 僧、墨筆上声点アルモ、フツウ「僧」ハ平声。
- 友、「支」ノ可能性アリ。

- 157 (早世ノ右注) 七、「八」二重書。(間ノ下、挿入句初二字) 不及、墨抹。「灌頂」以下、地端ニ沿テ横並ビ。
- 158 覚雄僧正ノ裏、墨筆ニテ「地藏院方」トアリ。(本文行) 嚴・也、墨抹。
- 159 賴瑜法印ノ裏、墨筆ニテ「傳法院俊音房也」トアリ。実際ニハ第47紙上ニ乗ル。
- 160 (道教右注) 遍智院、「地藏院」ヲ墨抹シテ右傍書。(■■右注) 地藏院・法印、墨抹。親快、右肩ニ二字ホドアルモ未詳。(親快左注) 地藏院法印、墨抹。(親惠ノ) 親、書キ損ジテ重書シ、サラニ右傍書。(宗顕ノ) 親、墨抹シテ右傍ニ「憲」。(秀親ノ) 秀、ナゾリ、サラニ左傍墨短線ヲ付シテ右傍ニ「守」。中觀、墨抹シテ右傍ニ「澄禪」。
- 161 (元海ノ) 海、ナゾリ。
- 162 成、墨筆去声点アリ。
- 163 以、墨抹。(營作勞ノ捨仮名) ヲ、墨抹。(右注) 且募号有・且稱有憲深讓、墨抹。(本文行末) 門、墨抹。
- 164 (右注) ■へ一向管領之、墨抹。
- 165 (六条右大臣顕房息ノ右注) 大納言雅親息、墨抹。親快ニ付クカ。
- 166 訴、移動符ニテ「詔」ノ上ヲ指示シテアリ(転倒)。
- 167 (本文行) 門葉・(右注) 弟子・(右注) 又、墨抹。(左注) 門葉、墨線ニテ挿入符ニ接続。
- 168 後、ナゾリ。
- 169 首、「主」二重書。
- 170 (早、申) 二重書、サラニ「早」ヲ右傍書。盛、墨筆平声点アリ。深、墨筆去声点アリ。
- 171 (嫉妬間ノ返点) 二、墨抹。(行末ノ返点) 一、墨抹。
- 172 (美深間ノ返点) 二、墨抹。
- 173 (嫉妬間ノ返点) 二、墨抹。(行末ノ返点) 一、墨抹。
- 174 (眉、墨筆濁平声点アリ)。
- 175 (任、本文滲ミテ右傍ニ書キ直シ)。
- 176 松橋ノ裏、墨筆ニテ「醍醐有之」トアリ。
- 177 (淨真ノ注) 印可、真倣ニ付ク可能性アリ。
- 178 (全賢ノ) 全、墨筆平声点アリ。(公紹ノ右注) 僧正、「僧都」ニ重書。全成、全ニ墨筆平声点、成ニ墨筆去声点アリ。(重圓房ノ) 重、墨筆濁平声点アリ。
- 179 (宗ノ右傍) ノ、墨抹。
- 180 意教上人ノ裏、墨筆ニテ「遁世以後」トアリ。
- 181 賢季ノ下裏、墨筆ニテ「當時/松橋有之」トアリ。
- 182 燃失ノ裏、墨筆ニテ「建武比」トアリ。
- 183 聖ノ裏、墨筆ニテ「證道上人」トアリ。
- 184 微、墨筆濁平声点アリ。弱、ナゾリ。
- 185 僧都、ナゾリ。
- 186 (六日) 二重書。
- 187 此說、墨線ニテ「天慶」ニ接続。(遍覺ノ下) 欽、「也」二重書。

(廿五ノ下) 「日」 ナシ、ママ。

寛、ナゾリ。

（左注）四年辞、墨線ニテ挿入符ニ接続。
常盤井、ナゾリ。

（注記四行目）復為、不明字ニ重書。（注記五行目）復、存疑。
記五行目ハ第63紙上ニアリ。

（右挿入句）勝、墨抹。

196 195 194 193 192 191 190